

36.02 cm. で殆んど発根しているものは無く、又母根の太さと根萌芽の大きさ及発生本数との間には明らかな関係は見られなかった。

4). 発根部位、発根形態等により発根状況を  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\beta\gamma$ 、 $\delta$  の5型に分け、発根数によって A、B、C、………1 の9級に分け、両者の組合せによつて移植可能度を表示して見たところ、移植可能と思われるものは僅か6本、やや可能と思われるもの僅か3本、計9本にすぎなかった。

5). 22年2月発根数の多い  $\beta$  及  $\delta$  型に属するものの中、地上高の大体近似のもの50本を選び、次の様な随筆な処理を施した。

i). 根萌芽基部	半周剥皮、(幅 2 cm)	9本
ii). 横走根 (母幹側)	全上	9本
iii). " (母根先端側)	全上	9本
iv). " (根萌芽発生部)	全上	6本
v). 根萌芽基部 1 cm 幅及び横走根母根端側 1 cm 幅半周剥皮		9本
vi). 無処理		8本

6). この結果両判別を与えた根萌芽は非常に旺盛な生長を以し、25年3月現在、直径 0.9—7.5 cm、平均 2.95 cm、樹高 1.70—3.55 m、平均 2.35 m、で、処理の方法、剥皮位置の如何に不拘殆んどが  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\beta\gamma$  型で発根数も多く、移植可能度を見て見ると、処理本は42本中33本は直ちに移植可能のものであり、残り9本もやや可能の部に属するものが多かった。

7). 之に反し無処理区では8本中1本のみが可能と思われるのみであり、又試験本以外の70数本も年と共に漸次衰弱枯死するものが多かった。

## 山茶花の研究 (予報)

石崎 厚美  
佐伯 岩雄  
森田 健太郎

1. 目的 化粧用精巧拵の減着用金属の防錆用毛織物の製絨用等に広い用途を有する山茶花は暖地に自生又は植栽され、農山村の特用樹種として重要である。山茶花には種々の品種あり収穫に相当の差があることが認められている。併しながら品種の改良は勿論、在来品種の調査と之充分に行われていない。筆者等は品種の改良を目的としてその第一段階として品種の調査を開始した。此処に各品種の形態の変異に就いて第一報として報告する次第である。調査に当り御教示を賜りたる外山先生に謝意を表する。

## 2. 調査方法

### (1) 調査範囲

- A. 宮崎県宮崎郡田野村
- B. 鹿児島県串木野町良 檜天然林
- C. 鹿児島県出水郡高尾野

(2) 調査木の選定 田野村に於いては代表母樹8本を選び、串良及高尾野に於いては5本を選定して調査に供した。

3. 調査項目 (1) 樹型 (2) 花(花軸の巾、長さ、切込、花冠径、雄蕊数、雄蕊長、花柱長、柱頭裂長) (3) 種子(色、一升当粒数一升当重量、榨油重) (4) 灰像(葉の中央と両側縁の部分と先端とを母樹毎に押しパパート10枚について調査)

4. 実験結果 (1) 樹型は次の5型に分類出来る。即ち三角枝重型、四角枝重型、高位弱型、低位弱型、円筒型である。

(2) 花の各部の変長は次の通りである。

名称	巾 <sub>cm</sub>	長 <sub>cm</sub>	切込 <sub>cm</sub>	花冠径 <sub>cm</sub>	雄蕊数 <sub>本</sub>	雄蕊長 <sub>cm</sub>	花柱長 <sub>cm</sub>	柱頭裂長 <sub>cm</sub>
範囲	1.15~	1.98~	0.12~	5.1~8.5	45~	1.24~	0.10~	0.07~
	339	423	0.65		127	1.82	1.19	0.71

(3) 種子 A. 色(黒色、黒色キジ、黒褐色、黒褐色キジ、褐色、褐色キジ)

B. 一升当粒数(960~2905) C. 一升当重量(717.5g~914.5g)

D. 榨油量(140cc~287.5cc) 種子一升の榨油量である。榨油量の重量に対する%は2.0%から35.2%の範囲に拡つている。

(4) 灰像

A. 結晶の種類(菱晶及砂晶)

B. 結晶の大きさ(15 $\mu$ ~75 $\mu$  平均38 $\mu$ )

C. 結晶の密度(5個~25個 平均14個)

## 5. 結論

榨油量の重量に対する%が2.0%から最大35.2%にして約1.7倍に相当する。その他の形質に於いても以上の如く変異の巾が極めて大である。従つて油量と連鎖関係にある形質を発見することによつて、優良品種の早期選別の可能性が大である。